

優柔不断さを測定する尺度作成のための 予備的研究

Preliminary Study for Constructing Scale of Indecisiveness

齋藤 聖子
緑川 晶

要 旨

本研究は「なかなか決められない」状態になりやすい優柔不断さの個人差を測定する尺度を作成するために、優柔不断な人のイメージや優柔不断になる場面の聞き取りを行った。調査は参加者17名に対し、主に面接を通して行った。質問紙では既存の類似する尺度から項目の選定を行い、主観的な自己評価と比較した。また優柔不断な人のイメージを記述し、自らが優柔不断だと感じた時のエピソードを収集した。その結果、既存の尺度のなかにも優柔不断群と非優柔不断群で得点差がない項目の存在が明らかとなった。また優柔不断な人の特徴として、「熟慮」、「不安」、「決められなさ」、「他者に対する行動」の4つが挙げられた。「熟慮」や「他者に対する行動」は既存の尺度ではあまり研究がなされていない要因であり、日本人を対象とした優柔不断さを測定する上で重要である可能性が示された。

キーワード

優柔不断, 意思決定, Indecisiveness Scale

問 題

何かを選択する場面で、どれを選んだらよいか迷ってしまい「なかなか決められない」状態が続くことがある。決められない状態は誰でも経験することであるが、「なかなか決められない状態」のなりやすい、いわゆる

る優柔不断さは個人差があると考えられている。これまでの意思決定の分野では選択肢の数 (Iyengar & Lepper, 2000) や決定者の感情状態 (Isen & Means, 1983) などが決定時間に影響を及ぼすことが知られている。近年ではそれらに加えて性格のような個人特性も決定時間に関わっていることが明らかになってきた (Frost & Shows, 1993 : Ferrari & Dovidio, 2000)。しかし、意思決定は身近で重要なテーマであるにもかかわらず、なぜ「なかなか決められない」状態になってしまうかということについての全貌は明らかになっていない。特に意思決定への個人特性の影響についてはまだ十分に研究がなされておらず、優柔不断な人がなぜ決められないかを考える上で、「なかなか決められない」状態になりやすい個人差を捉える必要があると考えられる。

意思決定における個人差を捉える尺度

意思決定における個人差を測定するための尺度として広く用いられているものに Indecisiveness Scale (IS) が挙げられる。IS は Frost & Shows (1993) が強迫神経症を持つ人の意思決定の困難さに着目し、強迫症状に左右されない決定の困難さを測定する尺度として開発した。IS の高得点群と低得点群で洋服選択やメニュー選択課題の選択時間を比較すると、IS 高得点群は決定までにより多くの時間がかかることが明らかになっている。更に Rassin et al. (2008) は、IS 得点が高くなるほど選択時間が長く、情報探索数が増えることを示すなど、選択行動との関連も認められている。

決定の困難さを測定する IS の他に、決定の先延ばしという行動自体に焦点を当てた尺度も存在する。決定の先延ばしを測定する Decision Procrastination Scale (DPS) も、DPS 得点の高い人はより選択までの時間が長くなるという行動との関連が示されている (Ferrari & Dovidio, 2000)。また Orellana-Damacela et al. (2000) は、全般的な先延ばし傾向を測定す

る DPS と IS の得点の関連を検討し、DPS と IS は高い相関があることを示した。

更に決定までの情報探索の多さを測定する尺度としては、後悔・追及者尺度 (Regret and Maximization Scale もしくは Maximization Scale) が挙げられる。Schwartz et al. (2002) は意思決定における個人差を追及者 (maximizer) と満足者 (satisficer) として区別した。追及者は最良の結果を手に入れることを、満足者はほどほどに満足できる結果を手に入れることを目的とした意思決定を行う。Nenkov et al. (2008) は Schwartz et al. (2002) の作成した Maximization Scale を再び因子分析し、3 因子の 1 つとして「意思決定の困難さ (decision difficulty)」を見出し、意思決定における後悔と正の相関、楽観主義とは負の相関があることを示した。

既存の尺度の問題点

意思決定における個人差を測定する尺度は様々な種類が存在する。しかし、「なかなか決められない状態」のなりやすさである優柔不断さを測定する尺度としてはいくつかの問題点が挙げられる。IS の 1 つ目の問題点としては因子負荷量が低い項目が存在しているという点である。Frost & Shows (1993) が作成した IS は 15 項目から構成されており、これまでの研究から 1 因子構造であることが確認されている。しかし近年の研究では、具体的な場面での不決断についての質問項目 (例えば「メニューをみて注文するとき、何を頼もうかなかなか決められない」など) は因子負荷量が全体的に低いことから、全般的な不決断傾向を測る尺度として IS の 15 項目から 11 項目を抜粋した General Indecisiveness を提案している (Rassin et al., 2006)。2 つ目の問題点としては、文化間で因子構造が異なる可能性である。IS の因子構造についてアメリカと中国の大学生を比較した Patalano et al. (2006) では、アメリカの大学生において 2 因子、中国の大学生におい

て3因子構造であることを示した。ISを日本語に訳した日本語版不決断傾向尺度は杉浦ら（2007）が信頼性と妥当性を検証しているが、因子構造については従来通り、1因子であることを確認したのみである。3つ目の問題点としては、1因子構造であることである。Spunt（2009）はISを決定嫌悪と決定回避にわけ、後悔のしやすさや行動の志向性などの他の個人特性との関連を検討している。その結果、それぞれに違った関連を示し、決定嫌悪と決定回避を分離することの有効性を明らかにした。また、ISでは決定に関する行動（「ささいなことを決めるのでも、自分はとても時間がかかるようだ」）に関する項目も感情（「決断をするとき、不安になる」）に関する項目も含め、1因子となっている。そのため、選択肢に対する情報処理が追いつかずになかなか決定できない人と、決めてしまうこと自体に不安を感じて決定できない人を弁別できない可能性が考えられる。もし仮に決定の困難さが上記のような行動面と感情面に分かれているとしたら、それを尺度によって弁別することは、優柔不断な人がなぜ決められないかという問題を解決する上で重要である。またDPSの大きな問題点としては尺度が5項目のみであり、決断の先延ばしという行動だけしか測定できないことが挙げられる。更には後悔・追及者尺度についても決定の困難さは下位因子の1つであり、優柔不断さを測定する尺度として十分とは言えない。

決定における個人差を測定する尺度としては上に挙げたもの以外にも、General Indecisiveness（GI :Germeijs & De Boeck, 2002）や認知的完結欲求尺度（鈴木, 2003）なども存在するが、項目数の少なさや下位因子としての扱いに留まるなど同様の問題点がある。更には欧米人や中国人と比較して、日本人はISが高いことがわかっており（Yates et al., 2010）、より項目を細分化して優柔不断さを捉える必要があると考えられる。そのため優柔不断さを測定するための新たな尺度を作成する必要があると考えられる。

本研究の目的

「なかなか決められない」状態になりやすい優柔不断さには個人差があると考えられるが、既存の尺度では優柔不断さを十分に測定できない。優柔不断な人がなぜ決められないかを考える上で優柔不断さというものを行動や感情など多面的に見る必要がある。なぜなら「なかなか決められない」状態になる原因は、個人の行動特性の他に、感情や他者の影響など複数の要因が関連していると考えられるからである。そのため、本研究では、優柔不断さを多面的に捉えるために探索的な調査を行い、優柔不断とは何か、ということをも明らかにすることを目的とする。

方 法

参加者 大学生17名（男性6名，女性11名，年齢18-24歳）を対象に個別の面接形式で行った。参加者の募集は講義中に行い，参加することによってエクストラクレジットとして授業の得点になることが説明された。

質問紙の作成 優柔不断とは何かを明らかにするために，不決断傾向尺度など関連すると考えられる尺度から行動と感情・思考の各10項目ずつ選定した。項目の選定に使用した質問紙は日本語版不決断傾向尺度，決断遅延傾向日本語版（宮元，1997），GI，認知的完結欲求尺度の4つである。なおGIには日本語版がなかったため，原文を訳し日本語として意味が通るように項目を作成し使用した。また情報探索に対する個人差を測定する日本語版後悔・追求者尺度（磯部ら，2008）では「買い物をしているとき，本当に好きな服を選ぶとなると時間がかかる」や「ビデオをレンタルするときはいつも，1番いいものを選びたいと思ってとても苦勞する」など場面を想定した限定的な項目が多かったため，「何かを決めるときに，できるだけたくさんの情報を得ようとする」という特に決まった選択場面を想定し

ない質問項目を新たに追加した。質問項目に対して「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の5件法で回答を求めた。

手続き 手続きは表1に流れをまとめた。まず参加者は面談室に入室後、実験者より今回の面接の説明を受けた。参加者はアンケート調査に参加し、その後具体的な内容として面接調査を受ける旨を説明された。その後、音声の録音に関する許諾を確認し、調査参加の同意書を記した。なお、録音された音声は実験後でも参加者が希望すればいつでも破棄することが可能と伝えた。

参加者はまず質問紙の回答(1)を行った。次に優柔不断な人のイメージを想起し記入した(2)。回答欄は「優柔不断な人は」に続く文章に穴埋めする形式で、回答部分は5つ用意された。5つのうち、最低限3つは記入するように指示された。その後参加者は自分が優柔不断かどうかを「はい」か「いいえ」で回答するよう求められた(3)。回答後、Visual Analog Scale (VAS) を使用し、優柔不断さの度合いを主観的に計測した(4)。VASは痛みのような直接測定することが難しい主観的な値を測定する方法(Wewers & Lowe, 1990)で、Piyavhatkul et al. (2011)はRosenberg自尊感情尺度とVAS(自尊心の高低)との関連を検討し、中程度の相関があることを明らかにしている。本研究では両端に「優柔不断である」、「優柔不断でない」と書かれた10cmの線分上に参加者が自分の優柔不断さの度合いを示した。

次に面接調査を行った(5)。アンケート調査の際に優柔不断かどうかを質問し、その結果によって2種類の質問項目を用意した。面接は半構造化面接で行い、具体的なエピソードを聞く場面では更に詳しい状況について質問した。優柔不断かどうかについて「はい」と回答した人には(A)「どういうときに自分が優柔不断だと思いますか」、(B)「特に優柔不断になってしまう場面や状況はありますか」、(C)「決めるのを先延ばしにしてしま

う方か、それともどれを選んだら
 いいかわからないまま、ずっと考
 えている方だと、どちらが近いで
 すか」という3項目を質問した。
 一方、優柔不断かどうかについて
 「いいえ」と回答した人には、(D)
 「なぜ優柔不断ではないと思いま
 すか」、(E)「こういう場面では優
 柔不断になってしまうというとき
 はありますか」、(F)「優柔不断に
 ならない秘訣はありますか」という3項目を質問した。

表1 面接調査の流れ

番号	調査内容	結果
	調査の説明・同意書の記入	
1	質問紙回答	1, 2
2	優柔不断な人のイメージ	3
3	優柔不断かどうかの質問	1
4	優柔不断さの度合い (VAS)	1
5	面接調査	5
6	イメージの自己回答	4
7	お菓子 (お礼) の選択	6
	録音使用の再確認	

右側の数字は関連する結果の番号を示した

最後に、参加者は自身が記入した優柔不断のイメージが自身にどのくら
 い当てはまるかを3段階 (あてはまる・どちらともいえない・あてはまらない)
 で回答した(6)。その後、面接のお礼のお菓子を10個のなかから選んで
 もらい、その決定時間を計測した(7)。面接の最後に録音を使用するこ
 との許諾を再確認し、面接を終了した。面接時間はおよそ40分で、最大で
 も50分以内に終了するよう調整を行った。

結 果

1. 質問紙の回答とVASの関連

優柔不断かどうかの質問に「はい」と回答した (以下、優柔不断群) 人
 数は13名、「いいえ」と回答した (以下、非優柔不断群) 人数は4名となっ
 た。優柔不断群と非優柔不断群の質問紙の得点を比較した結果、優柔不断
 群の平均得点は53.46、非優柔不断群の平均得点は41.25と有意差が認めら
 れた ($t(15)=3.23, p<.01$)。質問紙の項目を行動と感情・思考の2カテゴリー
 にわけ、優柔不断群と非優柔不断群の得点を比較した結果 (表2参照)、群

表2 両群の質問紙得点の平均値 (標準偏差)

	行動	感情・思考
優柔不断群	3.65 (0.47)	3.72 (0.59)
非優柔不断群	2.60 (0.49)	3.00 (0.53)

の主効果が有意になった ($F(15)=19.32, p<.001$)。一方で交互作用は認められなかった。またVASでの優柔不断さの度合いに関しても優柔不断群と非優柔不断群に有意差が認められた ($t(15)=7.73, p<.001$)。更に質問紙得点とVASの相関を検討した結果、中程度の正の相関が認められた ($r=.54, p<.05$)。

2. 各質問項目における優柔不断群と非優柔不断群の得点差の検討

各質問項目で優柔不断群と非優柔不断群に差があるか検討した結果、表3に示した通り、行動では4項目、感情・思考では2項目と合計6項目で有意差が認められた。

表3 各質問項目の群間比較

分類	番号	質問項目	優柔不断群 (n=13)	非優柔不断群 (n=4)	t
	1	決断を先送りにしようとする	3.85 (0.69)	2.75 (0.96)	3.85 ⁺
	2	何か重要なことで決断するとき、ささいな問題にこだわり多くの時間を費やす	3.85 (1.07)	2.50 (1.73)	5.80 [*]
	6	どうしても決断が必要になるまで決断しない	3.92 (0.76)	2.25 (0.50)	8.96 ^{***}
	7	何かを決めるときに、できるだけたくさん情報を得ようとする	4.38 (0.65)	4.00 (0.82)	0.47
行動	8	何かを決断するときには、あまりあれこれ迷わずにさっさと決めるほうだ	4.00 (1.00)	2.00 (0.82)	12.8 ^{****}
	13	決断を他の人に任せず自分で決めようとする	2.54 (1.13)	2.25 (1.26)	0.26
	15	ささいなことを決めるのでも、自分はとも時間がかかるようだ	3.54 (0.97)	2.00 (0)	7.58 ^{**}
	16	ひとたび決断したら、それについて思い悩むのはやめる	3.23 (1.3)	2.25 (0.50)	3.08 ⁺

	18	重要な問題は、直前まで決定を延ばす	3.38 (1.04)	3.00 (1.15)	0.47
	20	決断した後、しばしば自分の決断を再考する	3.85 (1.34)	3.00 (1.15)	2.29
	3	決断することは簡単だと思う	4.15 (0.38)	2.25 (0.50)	11.6****
	4	すぐに決断をしなければならぬ状況では不安になる	4.08 (1.4)	3.75 (1.26)	0.34
	5	ひとたび決断したら、それにかんがりの自信を持てる	3.08 (1.19)	3.00 (1.41)	0.02
	9	決断したあと、その決断に後悔しない	3.31 (0.95)	3.00 (0.82)	0.30
	10	決断をするとき不安になる	4.15 (0.8)	3.75 (0.96)	0.52
感情・思考	11	間違っただけの選択をするのではないかと、よく心配になる	3.92 (0.95)	3.25 (0.96)	1.45
	12	選んだり決めてしまったあとで、間違ってしまったと思うことがよくある	3.15 (1.07)	3.00 (0.82)	0.08
	14	何かを決めようとしているとき、私は自信がない	3.69 (0.85)	2.75 (0.96)	2.84 ⁺
	17	自分は決断力がないと思う	4.31 (0.63)	2.00 (0.82)	17.1****
	19	すぐに物事を決めてしまうと、何か間違いがあるような気がする	3.38 (1.12)	3.25 (0.96)	0.06

⁺ $p < 0.10$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.005$, **** $p < 0.001$

3. KJ法を用いた優柔不断な人のイメージの分類

優柔不断な人のイメージの記述は計69個となった。69個の記述のなかから「私の周りにも少なくない」「守ってあげたい」などの優柔不断の言動の特徴を捉えた表現ではない記述を除外したため、分析対象とした記述は66個となった。対象とする記述をKJ法を用いて整理した。

まず、66個の記述は26個の小カテゴリーに分類された。次に26個の小カテゴリーは15個の中カテゴリーに分類され、更に15個の中カテゴリーは、「熟慮」、「不安」、「決められなさ」、「他者に対する行動」の4つの大カテゴリーに分類された。結果として、慎重で熟考するという「熟慮」と、心配性で自信がないという「不安」が性格特性(図1. 右)として挙げられた。また決定するのに時間がかかるという「決められなさ」と人に選択を委ねる「他者に対する行動」が行動特性(図1. 左)として挙げられた。

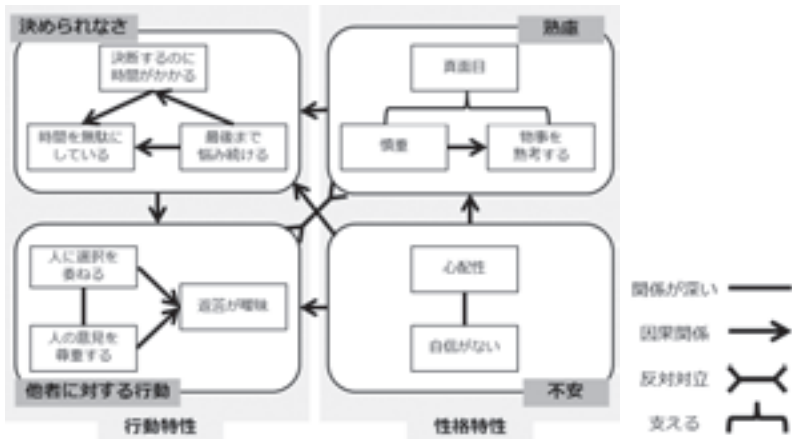


図1 KJ法による優柔不断な人のイメージの分類

4. 優柔不断な人のイメージと自己の一致度

優柔不断の言動のイメージと自分の言動の一致度（優柔不断のイメージとして記述した文章に参加者自身が「あてはまる」と回答した割合）は、優柔不断と回答した人では54.23%、優柔不断でないと回答した人では12.50%となった。

5. 面接調査での回答

5-1. 優柔不断群の回答の分類

優柔不断かどうかの質問に「はい」と回答した13名に (A)「どういうときに自分が優柔不断だと思いますか」、(B)「特に優柔不断になってしまう場面や状況はありますか」、(C)「決めるのを先延ばしにしてしまう方が、それともどれを選んだらいいかわからないまま、ずっと考えている方だと、どちらが近いですか」という3項目を質問した。

(A)「どういうときに自分が優柔不断だと思いますか」に対して、18個の回答を得た。まず、18個の記述は10個の小カテゴリーに分類された。次

に10個の小カテゴリーは5つの中カテゴリーに分類され、更に5つの中カテゴリーは、「全般的な行動」、「場面依存的な行動」、「性格」の3つの大カテゴリーに分類された(表4)。

(B)「特に優柔不断になってしまう場面や状況はありますか」に対しては、19個の回答を得た。まず、19個の記述は10個の小カテゴリーに分類された。次に10個の小カテゴリーは5つの中カテゴリーに分類された(表5)。

(C)「決めるのを先延ばしにしてしまう方が、それともどれを選んだらいいかわからないまま、ずっと考えている方だと、どちらが近いですか」に対しては、8名が先延ばしタイプ、3名が熟慮タイプ、2名がどちらも持っていると回答した。

5-2. 非優柔不断群の回答の分類

優柔不断かどうかの質問に「いいえ」と回答した4名に(D)「なぜ優柔不断ではないと思いますか」、(E)「こういう場面では優柔不断になってしまうというときはありますか」、(F)「優柔不断にならない秘訣はありますか」という3項目を質問した。

(D)「なぜ優柔不断ではないと思いますか」に対して、5個の回答を得た。記述数が少ないため、小グループにわけるととどまった(表6)。小グループとしては他者との比較が比較的多かった。

(E)「こういう場面では優柔不断になってしまうというときはありますか」に対しては、6個の回答を得た。(D)と同様に記述数が少ないため、小グループにわけた。この質問に関しても、他者に関する記述が多く見られた(表7)。

(F)「優柔不断にならない秘訣はありますか」に関しては、6個の回答が得られ、小グループに分類した。この質問では直感的に決めるという記述とメリット・デメリットを調べて決めるという記述のような真逆の方略

が見られた（表8）。

表4 「どういうときに自分が優柔不断だと思いますか」に関する回答の分類結果

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	回答例	回答数
A. 一般的な行動	決断の遅さ	決断への時間の長さ	「決定までに時間がかかる」	3
		決断のタイミングの逸機	「買う時期を逃がしてしまう」	1
	情報収集の多さ	情報収集欲求	「いろいろ情報を集めてからでないと決められない」	1
		他の選択肢への情報収集欲求	「いいものがあったても他のものが見たくなる」	1
B. 場面依存的な行動	場面の重要性	重要な決定場面	「重要なこと（高校進学先）のときに迷う」	1
			「重要な話はできるだけ伸ばそうとする」	1
		ささいな決定場面	「メニューを決めるとき1番最後まで迷っている」	1
	他者の影響	他者の影響を受ける場面	「みんなが何かを選ぶ状況」	1
			「みんなでどこに食べに行くか決めるとき」	1
			「決めようとするときに人の意見を聞いても悩んでしまう」	1
他者の影響	決定への他者の援助	「決めるときに誰かがやってくれないかな、と思うとき」	1	
		「人に意見を求めようとする」	1	
		他者に影響を与える場面	「予定を決めるとき」 「誰かを巻き込む決断のとき」	2 1
C. 性格	熟慮傾向	考えがち	「何かと1日のなかで考えていることが多い」	1

表5 「特に優柔不断になってしまう場面や状況はありますか」に関する回答の分類結果

中カテゴリー	小カテゴリー	回答例	回答数
全般的な選択場面	全般的な場面	「全般的に」	2
商品選択場面	食品選択場面	「食べるものを決めるとき」	2
	衣服選択場面	「毎日、着る洋服を選ぶとき」	1
	購入場面	「自分のものを買うとき」	2
		「大きな買い物するとき」	1
他者に関係する場面	他者への商品購入場面	「他の人へのプレゼントを買おうとするとき」	2
	他者と一緒にいる場面	「他の人と一緒にいるとき」	2
	他者に配慮する場面	「相手の意図を考えてしまうとき」	1
重要な選択場面	重要な選択場面	「自分にとって重要なこと」	2
		「人から見たら些細だけど自分から見たら大きい問題のとき」	1
選択肢の属性に関係する場面	情報の矛盾が生じている場面	「自分が得た情報と他の人から聞いた話が違うとき」	1
	選択肢の魅力に差がない場面	「メリットとデメリットの差がないとき」	1
		「どれでもいいかな、と思うことだと決められない」	1

表6 「なぜ優柔不断ではないと思いますか」に関する回答の分類結果

小グループ	回答例	回答数
イメージとの差異	「イメージで書いた優柔不断像と（自分は）異なっているから」	1
選択の早さ	「レストランですぐ決められる」	1
	「周りの人と比較してすぐ決められる」	1
他者との比較	「母親が優柔不断で、それと比べると自分は早く決められている」	1
	「自分が決め終わったあとも、人が決めていないから」	1

表7 「こういう場面では優柔不断になってしまうというときはありますか」に関する回答の分類結果

小グループ	回答例	回答数
重要な選択	「自分にとって重大なこと」	1
	「大学の進学先」	1
他者不在の選択	「一人でいるとき迷う」	1
他者への商品選択	「他の人を買うとき（好みがわからないと）」	1
他者に関わる選択	「先輩に誘われると他の予定より優先するか考えてしまう」	1
購入自体の選択	「買うか・買わないかで迷う（選択肢間では迷わない）」	1

表8 「優柔不断にならない秘訣はありますか」に関する回答の分類結果

小グループ	回答例	回答数
直感的な選択	「直感的に決める」	1
	「最終的に直感で決めたほうが良いと思ってから決断が早くなった」	1
適度な情報収集	「あまり何件も店を回らない」	1
自身の評価基準への理解	「自分が重要視する部分を分かっていること」	1
選択肢への理解	「どの選択肢に対してもメリット・デメリットを調べておく」	1
意思表示	「自分の意見を言うこと」	1

6. 質問紙得点と謝礼品選択の関連

謝礼品選択での決定までの時間についての群間の比較を行った結果、優柔不断群（ $M=7.54$, $SD=5.60$ ）と非優柔不断群（ $M=4.50$, $SD=1.91$ ）に有意差は認められなかった。また質問紙得点やVASとの関連を検討したが、どちらにも有意な相関は認められなかった。

考 察

優柔不断かどうかの質問に「はい」と回答した優柔不断群と「いいえ」

と回答した非優柔不断群の質問紙の得点と VAS に差が認められ、更には質問紙得点と VAS に中程度の正の相関が認められた。このことから主観的な優柔不断さの度合いと質問項目での回答が関連しており、質問紙得点は優柔不断さを反映していると考えられ、Piyavhatkul et al. (2011) の質問紙と VAS の関連についてと同様の結果を示した。次に質問項目を行動と感情・思考にわけて比較するとどちらも優柔不断群の方が得点が高かった。一方で項目別に群間の差を検討すると両群に差がない項目も多く、行動面について尋ねた項目の方が感情・思考面について尋ねた項目の方より群間で差があるものが多かった。しかし、本研究では参加者の人数が少ないため、差が見られなかった項目全てが群間に差がなかったとは考えにくく、結果を利用するには注意が必要であると考えられる。特に「ひとたび決断したら、それにかかなりの自信を持てる(反転項目)」や「選んだり決めてしまったあとで、間違ってしまったと思うことがよくある」のような決定後の後悔については群間にまったく差が見られなかったが、IS から 4 項目を削除した General Indecisiveness を提案した Rassin et al. (2006) でも決定後の後悔についてはある程度の因子負荷量を示しており、項目として残している。

優柔不断な人のイメージから、優柔不断な人の特徴として、「熟慮」、「不安」、「決められなさ」、「他者に対する行動」の 4 つが挙げられた。また決定に対する「不安」や「熟慮」が「なかなか決められない状態」を引き起こし、決定場面での「他者に対する行動」が起こることが示唆された。これまで意思決定場面における個人差に対して他者の影響はほとんど取り上げられてこなかったが、今回の優柔不断な人のイメージの分類から優柔不断な人の決定場面の行動として「他者に対する行動」が明らかとなった。また、意思決定の個人差を測定する決定遅延尺度や不決断傾向尺度には「決断の先延ばし」を測定する項目はあるが、「熟慮」に関しては考慮されていない。しかし Schwartz et al. (2002) が追求者 (maximizer) と呼んだ意

思決定において最善の選択肢を選ぶことを目的とする人は、なるべくたくさん
さんの情報を収集してから決めるため、最大限に情報を集めようとする人は
「なかなか決められない」状態になることが予想される。従って、優柔
不断な人を検出するためには、先延ばしに加えて慎重に選択肢を検討する
「熟慮」に関しても取り上げる必要があると考えられる。

自身を優柔不断と感じる場面としては、「みんなが何かを選ぶ状況」や
「予定を決めるとき」など他者に影響を与えたり、受けたりする場面が多
く挙げられた。これは優柔不断のイメージにあった「他者に対する行動」
とも類似しており、先行研究では検討されていないが、少なくとも日本人
の大学生を対象とした調査では、優柔不断を測定する上で他者の影響にも
配慮する必要があると考えられる。また情報収集の多さも、優柔不断の
イメージでも示された熟慮性と類似しており、熟慮に関しても優柔不断さ
の一因になっている可能性が示唆された。更には優柔不断の特徴としてあ
らゆる場面で意思決定が困難である (Crites, 1969) ことは、(B) の回答と
して「全般的に」という回答があったことや複数の場面の回答があったこ
とからも支持できると考えられる。

非優柔不断群での質問でも、他者の影響が多くみられた。例えば、自分
が優柔不断でないという理由についても他者との比較が半分以上を占めて
いた。また優柔不断になってしまう場面として重要な場面の他に他者に影
響を与える場面や他者が不在の時なども挙げられている。優柔不断になら
ない方法としては、あまり選択肢を比較しすぎず直感的に決定するという
回答が半分を占めた。この「直感による選択」とはイメージで挙げられた
「熟慮」の真逆であり、「熟慮」することによって優柔不断な状態になっ
てしまうということが明らかとなった。

今後の課題としては、本研究の目的であった優柔不断さ尺度を作成する
ことである。そのために、今回の面接調査によって得られたエピソードの

追加や、既存の尺度で群間に得点差がなかった項目の再検討が必要である。特に意思決定における他者の影響は従来の決定の個人差を検討した尺度にはなく、実際の行動との関連も示す必要がある。また、従来意思決定の困難さで重視されてきた決定の先延ばしよりも、熟慮の方が優柔不断のイメージとして挙げられたことから、熟慮について尋ねる質問項目を新たに追加し、先延ばしと比較する必要もあると考えられる。

引用文献

- Crites, J. O. (1969). *Vocational psychology* New York: McGraw - Hill
- Ferraria, R. J., & Dovidio, F. J., (2000). Examining Behavioral processes in indecision: Decisional Procrastination and Decision-Making Style. *Journal of Research in Personality*, 34(1), 127-137.
- Frost, R. O., & Shows, D. L. (1993). The nature and measurement of compulsive indecisiveness. *Behaviour Research and Therapy*.
- Germeiji & De Boeck (2002). A measurement scale for indecisiveness and its relationship to career indecision and other types of indecision. *European Journal of Psychological Assessment*, Vol.18(2), 113-122.
- Germeijs, V., & Verschueren, K. (2011). Indecisiveness and Big Five personality factors: Relationship and specificity. *Personality and Individual Differences*, 50(7)
- Isen, M. Alice & Means, Barbara (1983). The Influence of Positive Affect on Decision-Making Strategy. *Social Cognition*, Vol. 2, No. 1, 18-31.
- 磯部綾美・久富哲兵・松井豊・宇井美代子・高橋尚也・大庭剛司・竹村和久 (2008) 意思決定における“日本版後悔・追求者尺度”作成の試み 心理学研究 79 (5), 453-458。
- Iyengar, Sheena S.; Lepper, Mark R. (2000). When choice is demotivating: Can one desire too much of a good thing? *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol 79(6), 995-1006.
- 宮元博章 (1997) 遅延傾向に関する研究 (1): 遅延傾向尺度の作成, 行動遂行に対する態度・特性および方略との関係 兵庫教育大学研究紀要, 第1分冊, 学校教育・幼児教育・障害児教育 17, 25-34。
- Nenkov, G. Y., Morrin, M., Ward, A., Hlland, J., & Schwartz, B. (2008). A short form of the Maximization Scale : Factor structure, reliability and validity studies, 3(5), 371-388.

- Orellana-Damacela, L. E., Tindale, R. S., & Suárez-Balcázar, Y. (2000). Decisional and behavioral procrastination: How they relate to selfdiscrepancies. *Journal of Social Behavior and Personality*, 15, 225-238.
- Patalano, A., & Wengrovitz, S. (2006). Cross-cultural exploration of the Indecisiveness Scale: A comparison of Chinese and American men and women. *Personality and Individual Differences*, 41 (5), 813-824.
- Piyavhatkul, N., Aroonpongpaisal, S., Patjanasontorn, N., Rongbuttsri, S., Maneeganondh, S., & Pimpanit, W. (2011). Validity and reliability of the Rosenberg Self-Esteem Scale-Thai version as compared to the Self-Esteem Visual Analog Scale. *Journal of the Medical Association of Thailand = Chotmaihet Thangphaet*, 94(7), 857-62.
- Rassin, E., & Muris, P. (2005). Indecisiveness and the interpretation of ambiguous situations. *Personality and Individual Differences*, 39(7), 1285-1291.
- Rassin, E., Muris, P., Franken, I., Smit, M., & Wong, M. (2006). Measuring General Indecisiveness. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 29(1), 60-67.
- Rassin, E., Muris, P., Booster, E., & Kolsloot, I. (2008). Indecisiveness and informational tunnel vision. *Personality and Individual Differences*, 45(1), 96-102.
- Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., White, K., & Lehman, D. R. (2002). Maximizing versus satisficing: Happiness is a matter of choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83(5), 1178-1197.
- Spunt, R. P., Rassin, E., & Epstein, L. M. (2009). Aversive and avoidant indecisiveness: Roles for regret proneness, maximization, and BIS/BAS sensitivities. *Personality and Individual Differences*, 47(4), 256-261.
- 杉浦義典・杉浦知子・丹野義彦 (2007) 日本語版不決断傾向尺度の信頼性と妥当性の検討 人文科学論集, 人間情報学科編 41, 79-89。
- 鈴木公基・桜井茂男 (2003) 認知的完結欲求尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 74 (3), 270-275。
- Wewers, M. E., & Lowe, N. K. (1990). A critical review of visual analogue scales in the measurement of clinical phenomena. *Research in Nursing & Health*, 13(4), 227-236.
- Yates, J. Frank, Ji. Li-Jun, Takashi Oka, Lee, Ju-Whei, Shinotsuka Hiromi and Sieck. R. Winston (2010). Indecisiveness and culture: Incidence, values, and thoroughness. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, (41)3. 428-444.